湖水誕生

上

曽野綾子

湖水誕生 上

曽野綾子

定価一二〇〇円

湖水誕生　上

昭和六十年十一月二十日初版発行
昭和六十年十二月十日再版発行

著者　曽野綾子
発行者　嶋中鵬二
印刷所　三晃印刷
発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七
振替東京二―三四
©一九八五
検印廃止
ISBN4-12-001436-3

湖水誕生（上）目次

第一章　天国と地獄　5
第二章　向日葵の午後　23
第三章　高足蟹の家　41
第四章　朝飯　58
第五章　塒と穴　76
第六章　光の午後　94
第七章　岸のシャクナゲ　115
第八章　変貌に対する補償　133
第九章　白蛇の崖　153

第十章　啼き犬の任務　172
第十一章　風の王道　190
第十二章　最後の花　209
第十三章　「友好」のカモシカ　228
第十四章　蟻の男たち　245
第十五章　春の沈滞　262
第十六章　雪の悪戯　278

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

湖水誕生

（上）

第一章　天国と地獄

朝六時半、石尾春久が弁当の包みを持って、作並建設大町出張所の宿舎の玄関前に待っている通勤用のマイクロバスに乗り込むと、朝陽が燦々と車窓をうった。空気には信州の山の匂いがしている。バスには大体、その人の決まった席というのができてしまっていて、春久は一番後の左側に坐ることにしていた。まだ若僧だから、前の方の比較的揺れの少なそうな席に坐るわけにも行かない。もっとも、後の席というのは、ここから現場までの間に一眠りするにも便利であった。道は殆ど全面にわたって工事中で、上流の方へ行くと都会の人なら眠れるわけがないほど揺れる河床道路を行くのだが、そこはよくしたもので、眠ろうと思えばけっこう睡眠もとれるのである。もっともそのためには多少、こつのようなものが必要であった。坐りをぐっと浅くして、ずっこけたような姿勢をとり、へたりと首を曲げると、前後左右の揺れに対してかなり対応できる。初め春久はまともな姿勢で眠っていて、或る時、前の座席の背についている金属製の棒に、したたか前歯をぶつけたのである。一瞬歯が折れたかと思ったが、幸いにも春久の歯は色こそあまりきれいではないが、よほど硬く丈夫にできていたと見えて、欠けもせずに済んだのである。しか

し、他人にはあまり見られたくないこの姿勢が、安全を考えれば一番適しており、そのためには、人目につかない最後部の席が、何より気楽ということにもなるのであった。

しかしその日、石尾は眠らなかった。眠ってもいいようなポーズを一応とってはいたが、若い石尾は、昨日、大町の「魔笛」という喫茶店で会った娘のことを考えていた。

石尾は現場が休みになる第一と第三の日曜の夕方、三十代の夫婦が二人だけで経営している「魔笛」に、いつもコーヒーを飲みに出かけるのであった。それが石尾の唯一の気晴らしであった。石尾は殆ど酒が飲めない。毎日、山の現場から灯のともる町へ下りてくれば六時半になっており、宿舎の風呂に入って食事をすれば、それで八時であった。朝は五時五十分には起きなければならないから、二人相部屋の自室で、ヘッドホーンで音楽を聴くか、テレビを見て眠るだけである。昔はわりと読書家だったのだが、モンタネッリの『ローマの歴史』を半月かけてまだ半分しか読んでいないことを考えると、我ながらみじめな気分になった。東京の大学の研究室に残った友達から、不眠症になっているなどという手紙が来たりすると、同情よりもうろたえた。石尾は今まことに動物的な生活を送っていた。

昨日の日曜日、石尾が「魔笛」に入って行くと、店は思いのほか混んでいて、空いている席は見つからなかった。石尾は数秒間うろうろしていたが、店の女主人が石尾の姿を見て、入口に近い席にいた娘たちの二人連れに向かって「お相席にお願いしますね」と言ってくれた。二人の前のコーヒーカップは空になっていたし、コーヒー一ぱいずつで、そう長くいられては叶わないという気持が、慇懃ではあったが、女主人にそう言わせたのであろう。石尾は言われた通り、席に着いたが、先生の言う通りになっている小学生のような気がしないでもなかったので、娘たちに

「おじゃまします」と一応の挨拶はしておいた。すると、相手は思いがけず、柔かくそれに答えて「どうぞ」と言ってくれた。

石尾はもともときわめて無口であった。家は東京の千歳船橋で青果商を営んでおり、三男で末子であった。母が「春久は物を喋らないから、土建屋になった方がいいだろう」と言ったのは、実によく息子を知っていた、ということになる。石尾は席に着いても、二人の娘たちの顔もまともに見られず、ポケットからハンケチなど出して掌の汗を拭いていたが、それを救ってくれたのは娘たちの方であった。

「こちらにお住まいですか？」

石尾は初めて顔を上げ、

「はあ、そうです」

と答えた。二人は当然もう少し詳しい返事を期待していたように思えたが、石尾の性格としては、それが精一ぱいであった。

「私たち、明日から友達がリーダーになってくれて、烏帽子岳へ登ろうと思ってるんですけど、高瀬の方でダムの工事が始まってるんですって？」

石尾はやっと二人の娘を眺めた。そう言ったのは髪の長い、やや痩せた娘である。

「はあ、そう、のようです」

石尾はなぜその時、自分がまさにその渦中にいるのだと言わなかったのか、自分でもわからなかった。逃げたのでもなく、ごまかしたのでもないが、石尾は彼女らが山に登ると聞いただけで、自分がダム建設の当事者であることを言わない方がいいような、本能的な予感がしたのだった。

「バスは葛温泉までちゃんと行ってるんですか？」
質問するのは、もっぱら髪の長い娘ばかりである。石尾はもう一人の方を眺めた。髪を一種のお河童にした娘の方は、眉が濃くてしっかりした顎の線をしており、強い眼であった。
「バスは葛まで行きますけど、今、全面改修中で、道悪いですよ」
石尾はようやく一人称で言えるようになったが、その言葉も娘たちから見たら、単なる土地の事情に詳しい人間の話として聞かれるかも知れなかった。
「いやあねえ、道も山も荒らしちゃって、ダムなんか作らなきゃいいのに」
石尾は、もうこの手の言葉を何度か聞かされた筈だと思いながら、やはり少し心が傷ついていた。それでも石尾は気をとりなおして、
「学校は東京ですか」
などと尋ねていた。無口な石尾にしたら上出来の方だった。
その結果、石尾は二人の娘たちの名前や生活を知ったのであった。二人は同じ高校の友人同士で、髪の長い痩せた方の娘は山下陽子（やましたようこ）といい、東京の私大の国文科の二年生だということだった。もう一人の、無口なほうの娘は長谷川麻耶（はせがわまや）という名で、デパートに勤めているOLだった。二人は山の経験は一、二度しかなかったが、デパートの山岳部の青年が、二人休みをとって来るので、明日、彼らと烏帽子岳へ登るということだった。
「あなたも山登りはする？」
山下陽子が尋ねた。
「いや、あまりやらないんです。僕もこっちへ来て間もなくなものですから」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

しかし石尾がそれ以上自分について言わなかったので、二人の娘たちの方から石尾の身分について調査することは諦めたようだった。

「僕は山のことよくわからないけど、イタリアの登山家で、文学者でもあるキド・レイという人が言っている山についての言葉があるんですけど、知ってますか？」

石尾は何とかして相手に話題を合わせようと努めていた。

「『山がそこにあるから登るんだ』っていうあれじゃないの？」

「いや、違うんです。『アルプスとの闘争が、労働の如く有益であり、芸術の如く高貴であり、信仰の如く美しいことを、私たちは信じて来たし、また信じているからである』と言うんですけどね」

「すてきな言葉ね」

そう言ったのは山下陽子だったが、長谷川麻耶がその時初めて、表情をくずして頷いたのが石尾には印象的だった。石尾は何となく長谷川麻耶の方が好きなような気がしていた。

「この辺の山には、どんな動物がいますか？」

それが、麻耶が口にした初めての質問だった。

「麻耶ちゃんは、すごく動物好きだから」

「猿がいますよ。それからカモシカがいますね。人も住んでいない山奥に一瞬犬がいるのかと思うような姿を見かける時があるんです。でも考えてみると犬がいる訳がない。よく見るとカモシカなんです」

彼女たちは、間もなく駅へ着く仲間二人を迎えに行く、と言って「魔笛」を出たので、石尾が

二人と話をしたのは、ほんの三十分ほどだった。しかし石尾は別れ際に山下陽子が言った「又、どこかで会えたら会いましょうね」という言葉を本気に信じたいような気分になっていた。

今まで大学時代にも、女の子の友達が丸っきりなかったわけではない。しかし喫茶店でお茶を飲んだくらいで、その余韻が翌日まで持ち越されるなどと言うのは、よほど都会的な気分に飢えているせいかと思った。どちらかというとあの髪の長い山下陽子の方が、人は明るくて美人だというであろう。しかし長谷川麻耶のあの無口な、いつも何かを考えていそうな性格の方が強く石尾の心に灼きついてしまっている。

バスは間もなく、お決まりの顔ぶれを乗せて出発した。

石尾は眼をつぶって仮眠の姿勢をとっていたが、その次にバスが停った所は大出の食料品屋の前だということは体で分かっていた。ここは籠川と高瀬川の分岐点で、北西に籠川の渓谷へ入れば黒部ダムへ達する。しかし今、石尾たちの乗った通勤のマイクロバスは西の方へ高瀬川の川筋に沿って入って行くことになる。石尾が時々眼を開けると、道は顔の色まで青く染まりそうな青葉のトンネルの中にあった。あの娘たちも、昨夜この道を通って、葛温泉まで入った筈だと思ったが、夜では道が雑木の緑に包まれているということさえ感じられなかったであろう。

バスは暫く行って再び停った。開けられたドア越しに人声が飛び交う。上流への伝言を頼んでいるらしい。眼を開けなくても笹平であることが分かっていた。正確に言えば、ここは北安曇郡大町市平区野口なのだが、この地点には大正末期に作並建設が作った二万五千キロワットの高瀬川第三発電所があるので、東部発電が保守要員を置くための木造の宿舎もあった。そこが現在、上流にできる新高瀬川発電所の建設準備事務所になっているし、その脇に、工事のために特に再

開された駐在所もあるのであった。昔はここから七倉沢まで、六キロの索道がついており、それを敷設するのに、どれだけ苦労したかという話は、今年の四月にここへ着任して以来、石尾は何度か聞かされた。

石尾はそのままずっと眼をつぶっていたが、葛温泉の附近まで来ると眼を開け、今までのずっこけた姿勢から身を起こして、作並のマークのついたオレンジ色の保安帽をかぶった。ここに作られる新高瀬川発電所の現場は、厳密に言えば旅館の二軒ある葛温泉の上流端から始まるわけで、そこから保安帽をかぶることが義務づけられていたのだが、今日、石尾は、そこに二人の娘たちの姿を探していたのだった。

彼女らの話によると、二人は前夜、松本に泊り、昨日は木崎湖のあたりを見物して、夕刻の列車でやって来る長谷川麻耶の仲間二人と大町駅で落ち合うことになっていた。それから多分、夜のうちに葛温泉に入って、そこを基地として、烏帽子岳に登るといっていたのである。

バスを初めとして工事用以外の一般の車輛は、総て葛温泉で止められることになっていたが、そこには葛監視所があるので、作業用のトラックや、東部発電がごく最近になって「開発」した落石防止用のルーフキャリヤをつけたジープなどが数台停っていた。この装置は実は一二ミリの耐水ベニヤの合板を加工して自動車の屋根の上に取りつけただけのもので、口の悪い連中に言わせると、酒席の最中に地震に会った男が、盆を頭に載せて逃げ出す時の恰好にそっくりだということだった。しかし石尾の眼は、その間を歩いて来る登山者の姿に注がれていた。ここは何よりも槍ヶ岳への登山路に当っているし、他にも烏帽子ばかりでなく野口五郎、鷲羽、三俣蓮華などの山に登る人たちも通る。彼ら登山者に、道路の改修や、山の表土はぎ、伐採、測量、架橋工事、

土砂の運搬などが行われている区域を通る間だけ白い保安帽を貸し、それを約七キロ上流の濁(にごり)で返してもらうというやり方は、いつからとられたものか知らないが、石尾が来た時にはもうそういう制度になっていたのである。

監視所と言えば聞こえはいいが、プレハブの六畳ほどの小屋であった。そこに東発の労務課で傭った森田と岡田という土地の人が二人、車輛のチェックもすれば保安帽の貸し出しもやっている。梅雨が明けた頃から登山者の数はうなぎ上りにふえ、一日三百人近くになる日もあって、二人は大忙しなのであった。

登山者の中には保安帽を初めてかぶるという人も多かった。女の子などはかぶり方がわからないので、監視所の二人はいちいち教えてやっていた。

「森田さんと岡田さんはいいね。女の子の頬っぺたばっかり触っていられるだろ」

森田は四十四、五歳に見える。岡田はそれより少し若い。女の子の中には、「ヘルメット」をかぶせてもらったのが嬉しくて、監視所の前ですぐ記念撮影をする者もいるのである。

しかし中にはその場で食ってかかるように、どうしてこんなものをかぶらなきゃいけないのか、と言う若者もいた。当人の安全のために渡したつもりの保安帽が挑発的に道の脇に捨てられていたり、途中の崖の水を汲むのに使ったらしく、中に果物の食べかすを突っ込まれたまま放置されていたこともあるという。

石尾はバスが動き出すと、反対側の空いた座席に場所を移し、なおも右側を歩いている登山者をずっと注意していた。時々、バスは登山者のパーティを追い越した。一列に歩く彼らは、バスの近づいて来る音に振り返って、明らさまに不快感を表情に示すこともあったし、そうでなくて

も無言の背中に敵意を示しているように思えることもあった。しかし、今日、道にあの二人の娘の姿を見つけ、そしてもし麻耶が振り返ってこちらを見たら、石尾は開けられた窓から手を振って合図するつもりでいた。

バスはその間も迫った谷を、時には足許の流れに攫われそうな河床道路をさかのぼって行った。通称山の神と呼ばれる地点では、川は一際せばまり、曲り、その身を捩ったような狭隘な谷間を、いつも朝と夕方だけ通る石尾は、一年のうち一日でも、果してこの場所にまともに陽がさすことがあるのだろうか、と思うのであった。

石尾が作並に入社した年に当るのだが、昭和四十四年の八月に、高瀬の川筋は何百年ぶりと言われる洪水に見舞われたのである。約十日間、降り続いた雨は、八月十一日の朝になって急に激しくなり、濁、不動、ヒルと三つの沢の附近だけに、実に数百ミリという豪雨を降らせた。信じ難いことだが、高瀬川の左岸の北アルプス裏銀座だけに降り、下の大町では上流に暗雲がかかっているのが見えるだけで、よもやそれほどの集中豪雨が降っているなどとは想像もできなかったというのである。その時の川の水は毎秒五六〇トンという信じ難い量になり、それは吊橋を流し、巨石を浮き上がらせ、葛温泉にあった三軒の宿屋のうちの二軒を流出させ、一軒に土砂の堆積を残して、決定的なダメージを与えた。その時、流された流木の残骸は、まだ恐竜の白骨のように川の中に残っている。

しかし石尾の期待にも拘らず、登山者の中には、それらしい娘たちの姿もないままに、バスは終点に着いてしまった。と言っても、そこには、車庫も、待合室も、何かの事務所もあるわけではなかった。そこには昭和四十四年の洪水が荒れ狂って、何千年の昔から堆積していた上流の土

砂を洗い流して来て、それを集めて作ったと言ってもいいようなちょっとした平地ができており、そこに黄色いシートを張った見張小屋があった。強いて言えばそれが、石尾の出勤するオフィスだったのだが、素人が見れば「難民小屋」以上のものに見えるとは思われなかった。

石尾が小屋に入って行くと、既にそこには下請の早川組の六人の男たちがいて、口々に「お早うございます」と挨拶した。彼らの足許には、大きな石油ストーヴが、八月というのに真赤になっており、その上に夕顔の実ほどもありそうな大薬缶がかけられていたが、男たちは煙草に火をつけたり、身仕度をしたり、持って来た着換えの包みを、板きれと古釘を上手に利用して作っためいめいの「帽子かけ」につるしたりしていた。

「いやあ、昨日の休みは、大町へ『安曇野の農民美術展』を見に行って来たけど、大したもんだったよ。うちの人間で、猿渡次郎ってのが出品しててね。『専務、是非見に来て下さい』って、あんまりしつこく言うから、初めは義理のつもりで行ったんだね。そしたら上手なんでたまげたね。これが素人かと思うようなのが多いからね」

大世話役の弓削多吉郎が言った。

安曇野の農民美術というのは、大正期に洋画家の山本鼎が上田市に作った日本農民美術研究所の設立を機に、大町や白馬地方の農家が、その指導を受けて副業として始めたもので、手製の木彫工芸品を作って来たのであった。

「猿渡さんはどんなものを出品したの？」

石尾も胸のポケットから取り出した煙草に火をつけながら尋ねた。

「猿ですよ。猿が二匹」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.